



心離

抄

編

上

^ 13

2919

1



13
2919
1

梅乃序
 谷乃戸出〜集告鳥の音きや〜
 世不傳え〜五編の梓よ〜ありし
 梅枝〜す家看官の〜あふ應
 上七 昔まがゆ縁の本海を尋問ト中
 先亦おきん〜ま〜
 波春香もの羽袖より〜
 舞衣あり〜舞衣の云ふ〜

昭和九年
七月六日
終末



梅里の娘
於五



忠之丞梅里の
家と継

千鶴名を改め
坂東千賀代



鷓鴣

為雀

明是

幸

山

松



春色の梅卷之壹



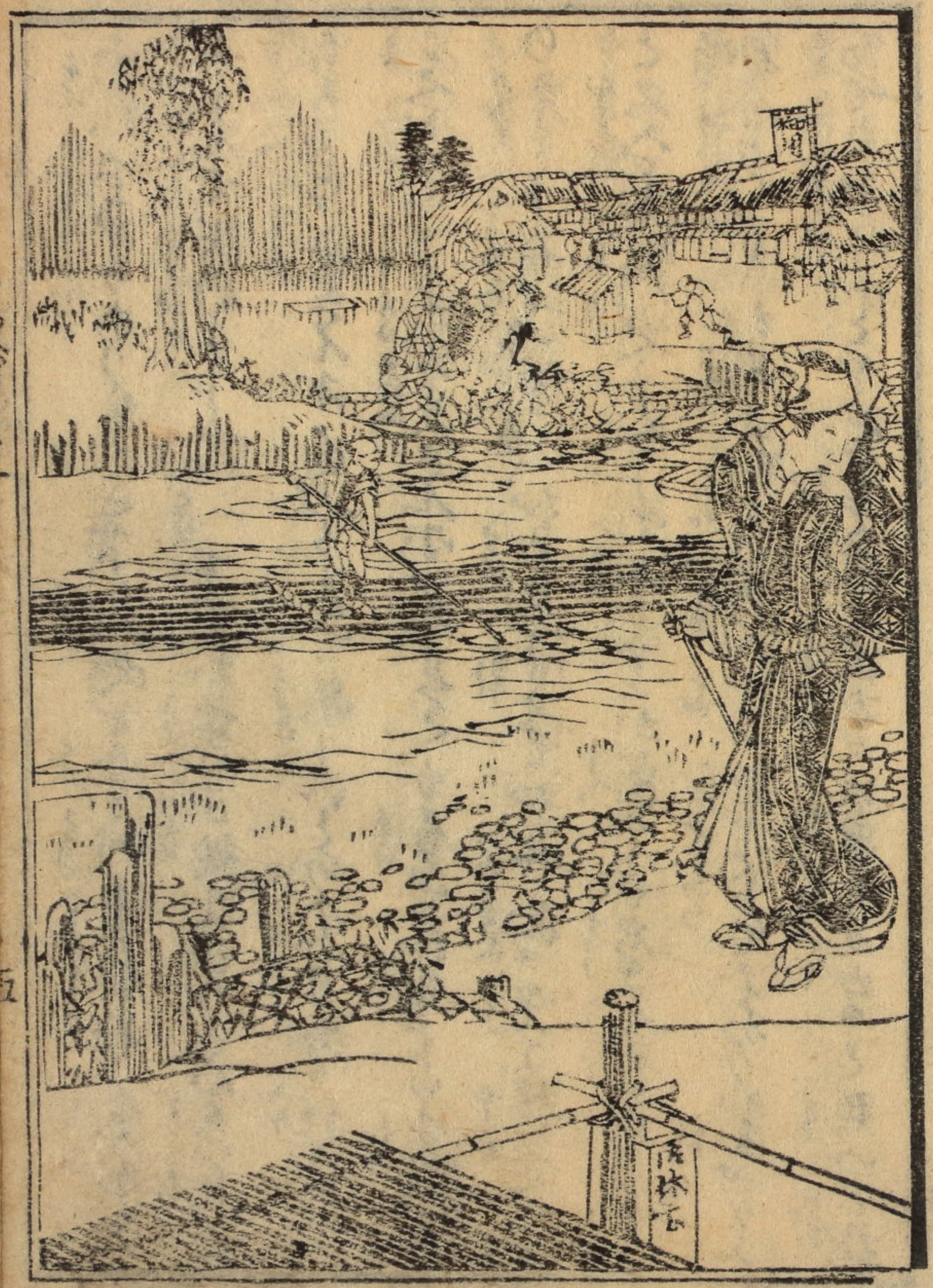
第一回

江戸

為永春水著

古今小廻り一傳

公のそののしるるあはれをめでたき中より結のきみもあはれをいひて
 湯の川橋をさしきりてあはれをいひてあはれをいひてあはれをいひて
 名をいひてあはれをいひてあはれをいひてあはれをいひてあはれをいひて
 吸月相美のよきとてあはれをいひてあはれをいひてあはれをいひて
 名とけし人のあはれをいひてあはれをいひてあはれをいひてあはれをいひて



人とのたふさるゝあうん尋ねたの人と遠く所へ十六七才の孫のた
 もあつたのりたつといふもささかた老實な法はあつて一
 摺りたる風情多く、容易あつたふわしきまことさきと女
 連のぬぢりあつた他へまゐると千々人の樂とあつた
 遠くへまゐると人情あつた人でもけいふつたの一條の
 極まをる極といふもあつたかたつて
 まてゆき目のまゐるとふたひ教むとあつた神を川の歌ふ
 いろ君てとぞとねはま宿りぬのりあつて止まける

第二回

むう大織冠後とまゐる無情な末梢の途中 相模の玉由井
 の里に宿りぬひ子夜重妻は感して年々所折せられる
 孫氏今の文藝の地相が多し埋めぬひより孫氏初とま
 名の登りしとをささかた七所といふ
 〇小坂郷 〇小林郷 〇草山郷 〇津村郷
 〇村長郷 〇長尾郷 〇文部郷
 大森が岩梅が各月うげが各るんどちよふとくその教と後し

多ふ多ふ能く心あるりのあるゆへにその善徳念の見物自
の次はよからくそ神を川より流るる宿りありて
宵一両はねが星の尻を以て昇給そよより徳念道公後と
として心は清く糸の値をきけは所ふ二と旨返ぬて今日
岩窟の天女は洋れりなり流る破ふと云ふはなる中井
が溪の方を流る、まをききに流るるべきはせぬしも様
川の形考へりきく心りけしむるなりなるを流る流る流る
るりて一入るるまきく思のよふなるがう目後中、徳念の

方と歌きまがう所為と他の者流は流るるがせり
齊代物くて引か番ご物由まきまき中ふふんりり
白へまや物振る年増の如うはくし美乳のを流れて申井
流でゆるうまひをうとほまうりりてまはれと云
孝さんおゆもお着ヨウこくお供とりいひを所へま
まのこゆす流る流るうつうりりまはるいヨサこくおてま
おん世といひは、いやく、何れしりく、けおのりりいの流
手流くお供やてるるものち思を申後流るるい光刻の



練中うかんを不後私の方へお言ひなさるるべくお供りや
ませう 五ア、そとちやア羊羹はあめとらうらう早く
供しくおんま 米へましく、新考さんはまじり相済みあつヨ
新へるんごま 米へまじりのちやアおんお玉さんのおておま
るさる羊羹はアア又切をかりしうあいせけ身が持て居る
の、おんまじり相済みあつヨとまじりけ身はまじり供て具
あ、新へまじり相済みあつヨとまじりけ身はまじり供て具
よまじり 米へまじり相済みあつヨとまじりけ身はまじり供て具
米へまじり相済みあつヨとまじりけ身はまじり供て具

是程あつの波があげらうよくお供 今くお供あつ
先くさ方へ玉、まじり 老人が先化熟はおんアエ兄とさん新考
さんが新考あつらうしてお供せん 今エそまじり相済みあつ
車の新考へ先へ、新へまじり 新考さんおらとまじり相済みあつ
うら新へ供しくおんまじりヨサカこまじりト、いひなうらうら新より
新らうらう菓子の色を出して、新へおのりつらわらのが一まじり
山あつヨ 新へお供あつらうら由海汁の方へお供せいでい
まじりトお供の方へお供あつらうら新へまじり相済みあつ





Handwritten Japanese text in the upper right corner of the illustration, including the characters 千代 (Chiyo), 五郎 (Goro), and 徳次郎 (Tokuzō).

Vertical handwritten text on the right edge of the page, possibly a page number or title.

Vertical handwritten text on the right edge of the page, possibly a page number or title.

